

Title	司馬遼太郎『殉死』論
Author(s)	尾上, 新太郎
Citation	大阪外国語大学論集. 20 p.153-p.165
Issue Date	1999-03-30
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/79789">https://hdl.handle.net/11094/79789</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 司馬遼太郎『殉死』論

尾 上 新太郎

An Essay on Ryotaro Shiba's "The *Junshi* (Self-Immolation)"

Shintaro OGAMI

General Maresuke Nogi is one of the heroes of the Russo-Japanese War of 1904-1905. He won the battle of the Fortress of Lushun as commandor. But, the victory was dearly bought. A great many Japanese soldiers died on the attack on the Fortress Lushun.

Ryotaro Shiba unfavorably criticized Nogi in his work of "The *Junshi* (Self-Immolation)." In it, Shiba said that the victory at the Fortress Lushun cost a great many lives, because General Nogi had almost no military faculty and he was a self-satisfied idealist. Nogi immolated himself on the death of the Emperor Meiji. About this, Shiba said that Nogi was a person of self-absorption and the behavoir mainly reflected his fantastic charactor.

Shiba was too hard on Nogi. He was not modest and fair. He should have diverted himself of preconceived notion.

It is said that Nogi was a very sincere man. I think so, too.  
But, we have to appreciate the meaning of this sincerity. It had a concept of religion.

Now, Shiba was a person who experienced World War II.  
During the war, he was an official of the Imperial Japanese Army.  
His severe criticism on Nogi may have some relations with that experience.

Did Nogi take an objective view of the Japanese nation? To say in a strict sense of the word, it may be extremely difficult for us to be perfectly severe in real life.

### 1. 司馬の乃木評

司馬遼太郎の『殉死』は、乃木希典批判の書である。司馬にとって、乃木の印象は悪い。  
例えば、

生涯洞窟のなかで灯をともしていたような、そういう数奇なにおいの人物

と評している。乃木は、日露戦争の時第三軍司令官として旅順要塞攻略を指揮、これを陥落させた英雄である。この乃木に対して、司馬は、

乃木希典は軍事技術者としてほとんど無能にちかかった<sup>(1)</sup>

と批判している。ために、出さなくてもいい多大の人的被害を、日本軍は旅順攻略戦において出すはめになったというのである。参謀にめぐまれなかった不運もあったとはいえ、乃木の責任は重い、という。

司馬はこの小説において、手ひどく、乃木の軍事技術者としての能力のなさをあげつらっている。又、乃木はひとりよがりの精神主義者だったともいい、この点でもこっぴどく批判している。

乃木は求道者タイプの人間で、武士道的精神に厳格に生きた人ととまれられるが、その際、以下のことに留意すべきである。乃木の場合、自分が自分流に理想として掲げる精神的生の演者に、自分みずからがなり、陶醉して生きたのであり、いわばその生は美的生というべきものであった。乃木は、要するに酩酊体質の人間であった。

以上は、司馬の言葉をまとめたものである。

乃木は、明治天皇の大葬の日ー1912（大正元）年9月13日ー、妻・静子と共に、天皇に殉死した。1877（明治10）年の西南戦争の時、乃木は薩軍に軍旗を奪われた。遺書によると、その死には、そのことに対して責任をとるという意味が、大きくあったものである。西南戦争は、乃木の殉死の35年も前のことである。何たる責任感の強さかと、後世の私なども思う。だが、司馬は厳しい。クールである。自分に陶醉するタイプの人間の自己満足の面が大きかったと見ている。乃木は、陽明学の影響を受けた人だが、この点を、司馬は乃木理解の、一つの視点にしている。

自分を自分の精神の演者たらしめ、それ以外の行動をとらない、という考え方は明治以前までうけつがれてきたごく特殊な思想の一つであった。希典はその系譜の末端にいた。いわゆる陽明学派というものであり、江戸幕府はこれを危険思想とし、それを異学とし、学ぶことをよろこばなかった。この思想は江戸期の官学である朱子学のように物事に客観的態度をとり、時に主観をもあわせつつ物事を合理的に格物致知してゆこうという立場のものではない。陽明学派にあってはおのが是と感じ真実と信じたことこそ絶対真理であり、それをそのようにおのが知った以上、精神に火を点じなければならず、行動をおこさねばならず、行動をおこすことによって思想は完結するのである。行動が思想の属性か思想が行動の属性かはべつとして行動をとみなわぬ思想というものを極端に卑しめるものであった。

司馬は又、大塩平八郎についてこういっている。

大塩は幕府の下級行政官でありながら幕府に対し、武装蜂起した。しかも大塩は奇矯な性格のもちぬしではなく、その現職当時は能吏といわれたほどの男であり、さらに若氣ともいえぬ年齢であった。齢は四十三になっていた。それほどに常識世界の男が、まるで衝動のような唐突さで、反乱をおもいたったのである。たれがみても反乱をおこして勝てるような時代ではなく、成算など万に一つもなかった。それでもおこすというのが、この学派の徒であった。この学派にあっては動機の至純さを尊び、結果の正否を問題にしない。飢民をみれば、惻隱の情をおこす。そこまでが朱子学の世界における仁である。陽明学にあっては、惻隱の情をおこせばただちに行動し、それを救済しなければならない。救済が困難であっても、それをしなければ思想は完結せず、最後には身をほろぼすことによって仁と義をなし、おのれの美をなすというのがこの思想であった。大塩は乱をおこし、このため市中の焼けること一万八千戸、ついに補史に包囲され、自殺した。

（日本的）陽明学派の人々は、動機の純粹さを尊び、行動を極端に重視するという。そして、行動の結果の正否は、本質的に問題でないとされる、と。司馬に従うなら、陽明学派の人々は、非合理的で、狂信的である。さらにいえば、美的主観的で、一人よがりである。無論、乃木もそういう陽明学派の系譜下にあったと司馬はいう。又、乃木は陽明学的体質をもって生まれてきた人ともいっている。陽明学を学んでも、影響を受けない人は受けないからである、と。

司馬は、（日本的）陽明学の批判者である。その陽明学の影響を受けていた乃木は、そういう意味では、当然批判の対象になる。

## 2. 三島由紀夫のこと

私は今、三島由紀夫のことを思い出す。三島は1975(昭和45)年11月25日、東京・市ヶ谷の陸上自衛隊東部方面総監部総監室で、衝撃的な割腹自殺を遂げた。当時、一大センセーショナルな事件として、ジャーナリズムにも大きく取り上げられた。司馬も、この事件の批評を早速行っている。事件翌日の「毎日新聞」(朝刊)に、「異常な三島事件に接して」という記事をのせた。要点は、以下のようなものである。

思想とは、そもそも虚構であり、それでしかないものである。密室において結晶化されるべきものであり、結晶化されるところに思想の栄光がある。思想の社会的実践を直接もくろんではない。もくろむなら、狂人である。三島の死は、彼の個人的美意識の問題とすべきであり、社会的、政治的問題として扱うべき筋合いのものではない。

司馬は又、この記事の中で陽明学を批判し、三島を陽明学派の系譜下にあるものとしている。

但し、司馬の陽明学批判は、彼自身、日本の陽明学と限定した上でのものである。

司馬とは逆に、三島は陽明学の信奉者であった。三島が陽明学をどう捉えていたかは、彼の論文「革命の哲学としての陽明学」（『諸君』1975年9月号）に詳しい。

三島は、日本の精神風土に合うように改変された、日本的陽明学を問題にし、大いに評価する。三島によれば、それは能動的ニヒリズムの意味をもつものである。だから、行動の結果の成否は、本質的に問題にならない。又、大塩平八郎の学説の紹介を詳しく行い、その破滅的な行動にも言及するのだが、無論というべく、深く、何かにつけ、三島は大塩に好意的である。司馬とは正に反対である。（日本的）陽明学には、デモニーッシュな要素があるとも三島はいつている。三島の陽明学に関する理解が正鵠を得たものであるかどうかはともかく、三島という人を理解する上では大変有意義な論文と思う。

さて、司馬によるなら、日本的陽明学の行動主義は否定されなければならないものである。そもそも思想というものは密室でつくられるべきものであり、そこにおいて結晶化がはかれるところにこそ、栄光があるものである。行動をもって、直接社会化すべき筋合いのものではない。

又司馬は、既出新聞記事中、自分たちの時代の日本の社会、日本の大衆の健全さを指摘している。指摘は、三島の行動に自衛隊員の中から、反発するものこそあれ、同調者が出なかったことを主な理由とするものである。しかし三島の立場に立っていえば、話は別様になる。三島の既出論文に従って私はいうのだが、司馬が共鳴を示すその日本の大衆社会というのは、そもそも思想では動かないことを本質とするものである。そこでは、認識と行動が根本的に乖離している。私は三島のいうことを首肯する。

司馬は、同時代の日本の大衆のことをよく理解した上で話をしているとはされない。適当に自分の都合のいいように扱って話をしている。

三島は、命よりも大事なものがあることを説いた。思想を説いた。思想的生を説いた。不法行為を行い、切腹自殺という非常の手段を用いて。しかし、自分の訴えることが、一般に受け入れられるとは、特に思っていないであろう。期待してはいなかったであろう。三島の陽明学の理解、受けた影響の深さからして、そう考えられる。

三島の内面に極力想像力を及ぼして、彼の理解に勤めてみよう。

一般に他人を理解しようとするなら、その人に極力近付いてみる必要がある。視点を換えていえば、理解する側は、極力おのれを無化する必要がある。無心になる必要がある。

このことを、三島事件について書かれた小林秀雄の「感想」（『中央公論』1976年1月臨時増刊号）と題した小文から、私は学んだ。

そこで小林は、三島を、運命的に形而上学的課題を背負わされた人物と見ている。人間生死の謎に運命的に捕われた人間というわけである。そして三島は、その自分が背負わされた課題から眼を逸らさなかった、と。事件はその結果という。天皇とか右翼といったものとは、三島の行動は、直接関係ない、三島事件は、政治的事件などではない、と。又日本の歴史に、こういう人物

が出る性質がある、とも。

私は、この小林の評論から種々学ぶところがあった。他人を理解しようとするなら、極力相手の立場になってみる必要がある。虚心坦懷に相手に接する必要がある。極力相手の身になり、相手の気持ちを汲んで、理解の歩を進める必要がある。こういったことも、私は小林に学んだ。先に同趣のことをいったが。こういう点からするなら、司馬の乃木や三島に対する理解は、そもそもその態度の点で問題があるとされる。

### 3. 小林秀雄の乃木評

初めて司馬の『殉死』を読んだ時、私はこれは、乃木希典のポンチ絵を描いたものという印象をもった。ポンチ絵という言葉が私に思い付いたのは、小林秀雄の「歴史と文学」（『改造』1941年 3、4月号）を読んでいたからである。その中で小林は、乃木希典をモデルにした芥川竜之介の小説「將軍」（<sup>2</sup>）を批判、これは乃木のポンチ絵を描いたものといっているのである。芥川の「將軍」も乃木希典批判の書である。乃木は敵のスパイが斬首されるのをモノマニアじみた眼で見ていた。乃木には殺戮を喜ぶところがあった。安っぽい通俗人情劇に落涙する、素朴で無教養な男であった。こういったことが書かれている。一方、旅順攻略戦で悲惨を極めた白鵞隊（決死隊）の、庶民出身の兵士の哀感も、高級軍人に象徴される国家権力の非道さとの対比のもと描かれている。小林もいっているように、芥川のこの小説の意図するところは単純でないと思われる。それはそういうことだが、又芥川が、乃木希典という一人の人間を理解する上で、あるべき姿勢を取っているとはいえないのである。虚心坦懷に相手に接しようとする努力や、極力相手の立場になってみようとする努力などが、この小説を書く上で、芥川にあったとはされない。

小林は又、「歴史と文学」中、スタンレー・ウォッシュバーン(Stanley Washburn)の話をしている。彼はアメリカ人で、日露戦争の時、アメリカのある新聞社の特派員として第三軍に従軍、親しく乃木の聲咳に接した人物である。乃木の殉死の報に接し、急遽、“NOGI”（1913年）を出版した。このウォッシュバーンについて、小林はこういう。

乃木將軍といふ異常な精神力を持った人間が演じねばならなかった異常な悲劇といふものを洞察し、この洞察の上になって凡ての事柄を見てゐる（<sup>3</sup>）

この点、芥川とは異質という。私もそう思う。乃木に異常な精神力の存在を認め、それに人間として共鳴するというのでないのなら、根本的に乃木理解は覚束ない。大根本をいえば、問題なのは、人を理解する際の理解者自身の姿勢である。

司馬の「殉死」は乃木希典批判の書であると先にいった。批判が悪いというわけでは、無論というべく、ない。しかし司馬には、故意に乃木を貶めようとする心の動きがあることが、同小説

から窺われる。これは何故か。何が、司馬にとっては問題だったのか。これらについては、後でよく考えてみる。

今ここでは、すでに出されている司馬『殉死』に対する批判に関する話をちょっとしておこうと思う。いくつかあるが、代表として、福田恆存の「乃木將軍は軍神か愚将か」(『歴史と人物』1970年12月増刊号)を取り上げる。福田はの中で、司馬の資料の扱い方が恣意的として批判している。自分の都合のいいように資料を読んでいるというのである。旅順攻略戦における司令官・乃木の行動は、実際は、乃木は愚将というような、司馬流の見方を結論としてもたやすものではなかったという。関係資料をちゃんと読んでいないこともあり、私としては、その辺のことにについては、責任あることは何もいえない。とはいえ、司馬が虚心坦懐に乃木に接しているのではないということを否定する気はない。それどころか、福田の論文を読んで、ますます司馬に対する懷疑の念を、主観的な気持ちをいわせてもらうなら、私は強くもつようになったものである。

#### 4. 漱石『ころ』の先生の自殺

ところで、夏目漱石の『ころ』の主人公「先生」は、若き日一大学生時代一罪を犯す。先生には、同郷の親友・Kがいた。彼はストイックで、刻苦勉励型の苦学生だった。精神主義者だったといってもいい。友情から先生は、自分と同じ下宿にKを住ませ、物心両面の援助を心からする。下宿先にお嬢さんがいる。先生は彼女に恋をしている。ある時先生は、Kからお嬢さんに対する恋心を打ち明けられる。それで先生は心変わりする。エゴイスティックな人間に突然変わる。Kを何とかしてお嬢さんから遠ざけようとする。恋はKの日頃奉じている主義に反する。その点から、Kを批判したりする。そうこうしているうち、Kは自殺する。この自殺は先生の言動とは直接関係ない。だが先生は、Kの自殺をきっかけに、人間の罪について考えるようになる。人間はいざとなると心変わりする。突然エゴイスティックになる。私の罪を犯す。その後先生は大学を卒業、お嬢さんとかねての希望通り結婚する。しかし先生の心は晴れない。それどころか、段々暗い人間になっていく。

ある時鎌倉の海水浴場で、先生は偶然一人の青年と知り合う。この青年は、闇雲に先生に慕いよってくる。小説の中で、主人公の名前は明かされない。「先生」という形で出るだけである。それは、この青年がそう呼ぶことによるものである。

1912(明治45)年7月30日、明治天皇が死ぬ。先生は、天皇の死と共に明治の精神が終わったと思う。そのことを妻にいう。妻は、それなら殉死したら、と答える。冗談だったが。先生はそれに対して、自分がもし殉死するとしたら、明治の精神に対してだ、とまじめに答える。同年9月13日、明治天皇の大葬の日、乃木希典が、妻・静子と共に、天皇に殉死する。先生は、この乃木の殉死をきっかけに、自殺を決意し、死んでいく。

乃木は35年間も、かって敵軍に軍旗を奪われたことに、自責の念をもち続けてきた。先生も長

年、自分のかつて犯した私の罪に対して、自責の念をもち続けてきた。結果、先生は自殺する。

先生は、青年に遺書を残す。先生は自分の過去を告白、青年に警鐘を鳴らそうとするのである。青年はまだ、自分のように私の罪を犯していない。人間生来の純心さを失っていない。だが、人間はいざとなると心変わりする。私の罪を犯す。どうしてもなくエゴイスティックになる。たとえば、金銭問題が絡んだ場合。だから、心して生きよという。先生は、人間は本来は清浄な心を有していると考えている。だが、生きてみると、私の罪で、みずからそれを汚しがちなものである。この点の注意を先生は促す。

先生は何をおいても、人間本来の純潔な心を尊ぶ。清浄な心を。そしてその心は、一度汚されたら、もう元へは戻らないものと思っている。

こういう先生に対して、森有正の批判がある。森は、原口統三の『二十歳のエチュード』（角川文庫）に序文「立ち去る者」を寄せているのだが、その中でこんなことをいっている。

自己の罪性を意識するものはけっして自ら己れを殺すことはできない。古来責任自殺ということがよく行なわれるが、これは真実の罪の意識が成立していない場合にのみ起こることである。漱石の『心』はどうか、という人があるかもしれない。私は『心』の先生は死ぬことによって、あの一篇に流れている罪悪意識を急に軽いものにしてしまったと断じないわけにはいかない。私は漱石が、作品の文学的芸術的構成への関心によって、その内容を犠牲にしたのだと思う。罪人は自ら手を下して死ぬことはできないはずである。

先生の自殺は自殺とされるものだが、森によるなら、そのことは、先生に真実の罪の意識がなかったことを意味する。もしあったのなら、自殺はできなかったはずである。又森は、

自殺は常に、自己の弱さからの敗北でない限り、自己への誠実、自己への偏執を特徴としている。

ともいっている。自己に対する誠実は美的ではあっても、倫理的でも、宗教的でもない、森に従えばなる。

先生は汚れのない、清浄な心を後生大事にするものである。しかし先生自身は、私の罪でそれを汚してしまった。一度汚れたものは、もう元には戻らない。そう先生は思っている。先生は自責の念に駆られる。駆られ続ける。自分の犯した罪に対する責任ということを深く思う。思い続ける。結果、みずから、自らを裁く。自殺する。先生は真面目な人と私は思う。誠実な人と。しかし、森に従うなら、先生は自分に対して誠実であった人とはされても、神に対して誠実であった人とはされない。実は森は、神による人間の罪の赦しということを考えている。キリスト教信仰による罪の赦しを。



内村鑑三が、『代表的日本人』（岩波文庫）中、

武士道は、決して人間を回心せしめ、新しき被造物、赦されし罪人たらしむることはできない。

といている。武士道は、「此世の一つの道德に過ぎない」とも。内村は、キリスト教信仰によって、神に赦されて罪人のまま生きるということを考えていた。森も同様といえる。そういう意味では、『こころ』の先生も、そして乃木希典も、問題があるとなる。極端に言えば、それぞれ、一人よがりである。しかし、私はどうも、森などの発想に違和感を覚える。少なくとも、乃木や『こころ』の先生、ひいては作家・漱石、これらの人々を十全に理解しようと思ったら、これらの人々に即した誠実の意味を考慮してみる必要があるのではないかと思う。

西田幾多郎は、『善の研究』（岩波文庫）中、王陽明の知行合一説を引用した後、

真実の知識は必ず意志の実行を伴はなければならぬ。自分はかく思惟するが、かくは欲せぬといふのは未だ真に知らないのである。

といている。西田においては、意志とは、「实在の根本たる統一力の発現」とされるものであった。神の意志の意味をそれはもつと説明してもよい。この意志の現実における発動が善である。

善とは我々の内面的要求即ち理想の実現換言すれば意志の発展完成である

といているのである。西田における理想の意味も分かる言葉である。又、

竹は竹、松は松と各自其天賦を充分に発揮するやうに、人間が人間の天性自然を発揮するのが人間の美である。

以下の言葉もこの際留意に値する。

個人の至誠と人類一般の最上善とは衝突することがあるとはよく人のいふ所である。併しかくいふ人は、至誠といふ語を正当に解して居らぬと思ふ。若し至誠といふ語を真に精神全体の最深なる要求といふ意味に用ゐたならば、此等の人のいふ所は殆ど事実でないと考へる。我々の真摯なる要求は我々の作為したものではない、自然の事実である。

西田によれば、善とは人間の天性自然を発揮することである。換言すれば、意志の発現である。

但し、その意志とは、「實在の根本たる統一力の発現」とされるものである。善とは又、私たちの内面的要求の発現とも説かれている。又、直前いう内的要求に最高に従うことが至誠といわれる。さらにいえば、西田は美を善と近接させて考えている。このように考える西田にあっては、自己に対して誠実であることは、正に直截に倫理的であり、宗教的であるのである。

ところで、漱石は、「模倣と独立」中、

あの乃木さんの死というものは至誠より出でたものである。（4）

といている。又、

人間は自然天然に独立の傾向を有っている。

と。勿論、独立とは、我がままな生き方をいうのではない。「精神的の一ポジティブな内心のデマンド」をベースにしたものである。この内心のデマンドから、道徳も芸術も生起すると漱石は考える。

私は漱石と西田とは、基本的に重なることをいっているものと思う。漱石は、「人間は自然天然に独立の傾向を有っている」という。つまり、「我」を天然自然に立てるのである。但しこの際、我は、一般にいう我ではない。それは、西田流の「内面的要求」－これにおいてあるものを指しているものと考えられる。もしそういうことでなかったなら、それを中心にして、道徳や芸術が生起するはずがない。

このようなことなら、漱石が乃木の行為のうちに見た至誠、そして西田流の至誠、この両者は、内容において基本的に重なるものとされるだろう。まとめると以下ようになる。

漱石は乃木の殉死に至誠を見ているが、その至誠は、彼においては、美にも道徳にも、そして宗教にも、積極的に関わる概念だった。その至誠という概念は、西田のそれと基本的に重なるものだった。

森有正によるなら、漱石の誠実というのは、せいぜい美学的概念でしかないものである。宗教や倫理などとは関わらない。しかし、本当は、漱石における誠実の概念はもっと深かったのではないと思われるのである。漱石は乃木の殉死に最高の誠実、つまり至誠を見た。漱石における誠実、至誠、これらは宗教や倫理などに、積極的に関わるものであった。無論今、西田哲学を思い合わせていい。西田流の誠実、至誠も勝義性のものである。もっとも私は、西田や漱石が、實在の根本的統一の発現としての意志的行動を現実上正しく取りえた人と、今直接いおうとしているのではない。

司馬の『殉死』に戻る。この小説は、乃木希典批判の書である。乃木は自己陶醉型の人間で、美的に精神的生（思想的生）を捉えていた。軍事技術者としては、ほとんど無能だった。お蔭で

旅順攻略戦では、出さなくて済んだ人的被害を多大に出すはめになった。まともな司令官だったら、もっとずっと被害は少なくて済んだだろう。又乃木の殉死は、彼の自己陶醉型の性格と関係し、美意識の問題として扱うべき筋合いのものである。

概略このようなことを司馬はいつているのだが、当をえたものとはされない。もっと乃木希典という一人の人間の、どうしようもなくというべくおかれるはめになったさまざまな次元の立場、いだいた理想、精神力、資質、これらに配慮しながら、話をすべきである。虚心坦懐に、司馬は乃木に接しているとはとてもされない。

ところで、乃木においては、西田や漱石が理想とした至誠が全うされたといえるか。乃木は真摯な人だったと、とまれ私は思う。しかし、宗教の観点からしても偉大な人だったとは思わない。乃木に自分の属する国家を客観視する視点があったとは、とてもされない。

## 5. 司馬遼太郎が教えるもの

さて、司馬は『殉死』を書いて乃木をこっぴどく批判したわけだが、そのことの背後に何があったのだろう。その真意は何だったのか。この点、司馬という一人の人間の身に、極力なって話を進める必要がある。

私は、司馬の乃木批判には、司馬自身の戦争体験が絡まっているのではないと思う。周知の通り、司馬は、いわゆる学徒出陣組である。1943(昭和18)年11月、大阪外国語学校蒙古語部2年に在学中だった司馬は、同校を仮卒業、12月、陸軍に入隊している。「学生運動と醗酵体質」(『司馬遼太郎が語る日本 未公開講演録愛蔵版Ⅲ』、朝日新聞社)中、司馬がこんなことをいつている。

私は、学生時代に兵隊に取られました。学校から軍隊に入ったのですが、それまでなんとも思っていなかった国家というものを、ちょっと考え込む気持ちになりました。その当時、「人生は25年だ」というはやり言葉がありました。私に21才だったのですが、戦争を前にして25才まで生きられるかどうかわからないような状態でした。なぜ国家というのは勝手に人の寿命を縮めることができるのかと、非常に疑問に思ったわけであります。

軍隊に入った司馬は、生殺与奪の権を握る国家というものに対して疑義を覚えたというのである。こういう懐疑は注意に値する。戦中派世代の人々—私は今直接には、学徒出陣組の人々のことを念頭においている—の精神構造が一般にどういうものであったかを見してみる。

安田武の評論「戦中派・その罪責と矜持」(『展望』1967年6月号)が、この点教えてくれる。安田は、戦中派世代の精神的骨格の美質として2点を上げる。一つは、「求道的姿勢に支えられた誠実主義の過剰」。他は、精神の貴族主義。精神の貴族主義とは、軍国主義とか全体主義といっ

た当時の風潮に流されることなく、精神や自己を独自に保持せんとするその内面性をいう。ところが、安田によれば、これらの美質故、彼らは全面的に戦争協力に赴くはめになったのである。そこに、戦中派世代たる学徒兵の悲劇がある。以下のこともいっている。

過剰な誠実主義は、対象と自己との距離を見失うことによって、しばしば盲目的な愛あるいは忠誠に献身しやすい、というような自己批判が、戦中派世代自身のうちに目覚めてくるためには、それこそ軍隊、戦場、敗戦という、その後のいくつかの試練が必要であった。

誠実ということは、悪いことではない。否私は、人間、誠実であっていくらの存在とまで思う。但しそういって、能事こと足れりとして話を終わらせるものではない。誠実であらんとしてそれに陶酔し、反社会的、反宗教的になることだってあるだろう。誠実であらんとして、結果、国家を誤らせることだってあるだろう。

一体、戦中派世代の学徒兵達は、国家というものをどう考えていたのだろうか。それは、即自的に肯定されていたのではなかったか。この点私は、田辺元の種の論理を想起する。種とは今、民族とか種族のことと考えていい。国家は、近代国家といえども、種的なものを基体として成立するものという。種は、自己保存の本能においてあるものであり、直接的生活意志体である。個は、種から生まれ、種的に生きる。種は個の生命の根源であり、生活の基盤である。戦争は、国家のもつ種性故起こる。戦争には絶対に勝たなければならない。もし負ければ、個人は生命の根源、生活の基盤を失うことになる。私たちのいづく人類の理想も、国家を媒介にしてこそ実現されるのである。この意味からも、戦争には絶対に勝たなければならない。

以上、田辺の「国家的存在の理由」（『哲学研究』1939年10月、11月、12月）に主にスポットをあてて、いうところの種の論理について略述した。田辺の思想で問題なのは、国家の客観性を正す視点が根拠をもって出ない点である。国家は常に即自的に肯定される。その前提のもと、諸々の問題が追究される。

田辺の判断論が、『種の論理の弁証法』（秋田屋）中の「七 実践の宗教性」に出ている。要点をいえば、以下のようなものである。

判断の主成分は、主語・述語・繫辞の三者である。主述は矛盾関係にある。この矛盾の統一を担う絶対無は、繫辞の媒介をまって具体化する。繫辞こそが判断の中核である。

私は、問題を感じる。田辺のようにいったら、判断の客観性が正せないだろう。それは根元的統一の結果として働くと考えるべきである。主述は絶対無において一つとされるが、そういうところでの統一と、繫辞の媒介をまってのそれとでは質が違う。田辺の国家というのは、その判断論における繫辞のように、客観性の点で問題があるものである。

さて、戦中派世代の学徒兵のことを考えてみると、まず、彼らは非常に誠実だったとされる。内面の世界を独自にもち、時流とは一線を画し、精神の貴族主義的に生きた、などと。しかし、

主観的だった。美的にも主観的だった。国家を越える価値に明確に視点を置いていたとまではいえない。西田哲学でいう内面的欲求に正しく生きえたとはされない。西田流の誠実を実践しえた人々とはされない。誠実に生きるとは、事実問題としていって、陥穽のあるものだろう。理想とか理論上はともかく。この点に十分留意して、猶誠実に生きることを価値とする。今そういうことを思う。その際、国家を越えた価値に視点を置くことを忘れまい。これは信仰の問題である。信仰の問題をもってこないなら、愛国心といっても、所詮自己愛の範疇を出ないだろう。

トルストイは、クリミア戦争に参加し、その戦争体験をもとに、『セヴァストポリ』を書いた。司馬は、『坂の上の雲』『水師營』中、このことにふれ、トルストイについて、こういっている。

愛国と英雄的行動についての感動をあふれさせつつも、戦争というこの殺戮だけに価値を置く人間の巨大な衝動について痛酷なまでののろいのこえをあげている。トルストイはこの戦争体験を通じて国家を越えた人間の課題に到達しようとし、包囲軍の側にあっては野戦病院の創始者であるナイティンゲールを出した。<sup>(5)</sup>

「国家を越えた人間の課題」とある点に着目しよう。司馬も亦、自分自身の戦争体験の一つ大きく踏まえ、同様の課題を追い求めるようになった人と思われる。

漱石は、評論「私の個人主義」<sup>(6)</sup>中、自己本位の重要性、個人の重要性を説きつつも、自分の個人主義は国家主義と抵触しないものといっている。国家危急の時には、個人の自由は制約されてしかるべきものといっている。そこで漱石は、愛国心を天然自然の人間感情と考えている。私にも愛国心はある。自国・日本をかけがえのないものと思っている。この思いは、少年の頃から少しも変わることがない。ただ、私の場合、漱石などとは違って、愛国心も、徹底していえば、自己愛の範疇を出ないものという思いが働く。そういうことでは、司馬に心引かれるものである。司馬は、「国家を越えた人間の課題」を何らかの意味で問うた人である。最後に以下のことをいっておきたい。この辺のことが田辺には分からなかったのだろうか。答えは、実は単純でない。田辺の「死生」中、

賢者は宗教的な信仰に於て直接に神や教祖のために身を捧げるであらうが、我々凡夫が身を捧げるのは直接に神のためとは考えられない。国のためである。<sup>(7)</sup>

とある。今私は、信仰的生の困難さを思う。先に根元的統一の話をしたが、それは絶対無においてかなえられるものである。とは、絶対無の境地をわがものにする必要があるということである。決して居直るわけではないが、私は今、自分の、人間としてのレベルの低さ、仏教という機根の低さを思う。しかし、だからといって、直ちに種の論理に走り、自足するような態度をよしとす

るのではない。種の論理的にしか生きれない自分、という問題意識ぐらひはもつ。ある種の悲哀の感情と共に。この悲哀の感情は、念の為いっておけば、信仰による神の、人間の罪の赦しという時の罪の意識とは、直接関わらない。そんな高度なものではない。

注

- （1）『殉死』の引用は、全て『司馬遼太郎全集23』（文芸春秋社）による。
- （2）『芥川龍之介全集5』（岩波書店）所収。
- （3）引用は、『新訂 小林秀雄全集7』（新潮社）による。
- （4）「模倣と独立」の引用は、全て『漱石近代文明論集』（岩波文庫）による。
- （5）引用、『司馬遼太郎全集25』による。
- （6）『漱石近代文明論集』所収。
- （7）引用、『田辺元全集8』（筑摩書房）による。

猶、文献引用にあたって、漢字の字体等適宜勘案して点がある。

（1998. 9 .21 受理）